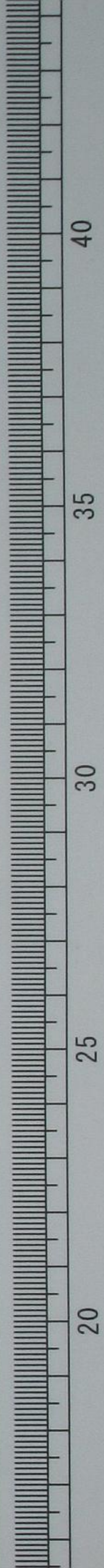


常山紀談

十三四

113
561
7



門 113
頁 561
巻 7

常山紀談卷之十三目次

一 采田助右衛門見積の事

一 後藤又兵衛決断の事

一 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事

一 神谷小介先登の事

一 藤堂玄蕃赤坂町を獲むの事

一 寺沢廣高加藤嘉明度量の事

一 春日九兵衛見積の事

一 村上彦右衛門先見の事

一 土方三九郎武功の事

一 小栗又市谷々見廻の事

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

十三目次上

一 秀家夜討せんといふ事

一 株瀬川合戦の事

一 縮次右近功名の事

一 浅香庄次郎働の事

一 林半次殿の事

一 伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事

一 毛屋主水物見の事

一 関ヶ原合戦嶋左近討死の事

一 飯尾甚大夫一騎先死の事 附 成合平左衛門の事

一 蒲生備中父子戦死の事

一 大谷吉隆平塚為廣最後合戦和歌贈答の事

一 瀧川内記功名の事

一 本多正重の事

一 梶左馬助御書を認る事

一 田邊甚兵衛幼年功名の事

一 辻小作中黒道随の事

一 嶋津義弘関ヶ原退口の事 附 大坂の高賈義氣の事

一 東照宮勝関の儀を延多ひの事

常山紀談卷之十三

備前國 湯淺新兵衛元復輯録

○岐阜の城攻ホツカス細川忠興オキナ七曲口ナナカマキへ向ムカひし。又ヨネダ采田助右衛門あ
まマシ見ミえエのノ門カド矢倉ヤクラハきキやヤすスくク打破ウツるルべベしシとト申マシ忠興チキウ子シ
細サイハハいイくク采田サイダ今イマ朝アサよりヨリ矢倉ヤクラよりヨリ持モチ出デるル前マエ王オウ次ジ等ト少シくク
かカりリハハ本ホン丸マルへヘ引ヒ入イりリしシゆユ志シとト申マシせセばバやヤがガ軍イクサをヲ進スめメ
てテ七曲口ナナカマキをヲ攻ウツ破クらラしシてテすス

○岐阜を攻破ウツクる時黒田クロダ田中タナカ藤堂フジドウ等の諸將シヨウシャウハハ犬山イヌヤマをヲ押オシへシり
しシ犬山イヌヤマの城シロ明アカのノまマりリるルをヲ岐阜ギフをヲ所トしてシ打ウ向ムカふムふフ大オホ
垣キよりヨリ石田イシダ鳩津トビヅ二ニ万マン餘リ打ウちチくクわワ来キるル頃キョウもモ八ハチ月ゲツ雨アメ
の後ノチ合カ渡ワ川カハ水ミヅをヲ増マすス諸將シヨウシャウ香カウがガ鳩トビのノ札シラにニ辻ツジよヨひヒえエ

て各将机は據て川を渡り待てや戦ふと評定して決
せぬ高虎銀の天衝此立物おつる曹を忌黒ちり掛る武
者八黒田家此士大将後藤又兵衛あまふ存る音をゆかちや
いと扇を揚てまひまうらば後藤はらをゆりのけく
来て跪く高虎いふ此川を渡るべから待て利有べきと先
の程よりいふと決せぬといふまうらば後藤お笑ひ評定も
時小よりいふ今日岐阜の城攻は後まきまうらば爰より一戦なり
内府は御面目ハハムまうらば川を討死の場とまきまうらば
然るまうらばハ男子まうらばハハムまうらば大言まきまうらば諸将
尤なりとて川を渡りまきまうらば

○合渡を渡る時長政の士大将黒田三左衛門可成川の東より

遙く敵を見渡り長政のかまは馬を乗せ朱の枝釣
のさし物指く思た馬のさしまうらばあまふあまふハハム
敵なり必討取べしとて長政勝敗ハ運命よめる事なり
なごきやまうらば敵を討てまきまうらばいふまうらば可成耳
まを聞入らば川は馬をお入向ふのまをせ上を遂よめ
武者を切く落し首よまうらば物を添く得たりりり石田が物
ぬ村山利久といふ剛の者なり可成が此功をむらうらば
毛付の功名とてまきまうらばいふまうらばた譽まきまうらば
○合渡の軍は長政は内神谷小次郎先がけりて川を渡り待
うけりて敵れ中よあめりてあまふあまふバ鎗よまうらば揚られ既
に危りりり時長政の軍兵進まかりりて敵を追うらば

小次流る血朱は深しを戸板に載り長政の前は来る
小次より我と先を争はん者長政なすは有べりと云ひ
長政をまつと見て小次より先立ち鎗を合せ一人も
いひばと争まば長政汝あつて誰う先づけまきよは
わの氣をとりとけりあはきこといふまきと小次後
有馬の温泉に浴して創愈り

○合渡り東國方の軍北るを追て赤坂まで進みゆく時
高虎の士大將藤堂玄蕃赤坂の町口にかけ入大音あげ百姓
商人をなやまひ小次とて悪逆の輩を討平け静謐を
致さん為り皆ちつともさわぐべくと觸通て其後
小家一ツ引壊ち東の方北町をばまきと相國の煙をた

てく高虎大に悦んで傳へて古の王者此軍を學べる
玄蕃哉とて其日暮らまき唐冠の曹を脱て逃へられぬ
○関ヶ原よそ 東照宮いまも岡山よ御忌陣をた已お諸

大將地の利と據り面を陣取りしは或夜諸陣俄はけ
とだかり寺澤志摩守廣高臥ながり徐に我既はまき
といひく斬かひく寝らまきり廣高士六人歩の者六人
を扱家とて三番に互ふかまきり途を異ゆ小の事を
必告来る今夜告来らまき夜討はつとる事をえより
知まきゆるちまきり其あつて夜忍びく加藤嘉明の陣所
を通る者ありとて忍び火付り切り捨よとのり嘉
明其士八主君の為に死を顧み吾陣所の備怠り彼ら

みして吾を窺ふべき殺と殺と勝敗にかつらむとて追々あつてしり

○丸毛兵庫が弟春日九兵衛大坂より大垣に到り諸將の内は二心ある人の陣所此有様必定味方敗北まべ陣替せらまよくと三成よすむまよども是を用ひむ果して敗り

後より前田利長春日をまよりまよりとも江戸駿府を陣に仕ふる事ゆゑしらず京極若狭守高次ハ東照宮志婚ちるゆゑよまひく乞招きあせ禄千石よるべし

の仰よりりて京極家よ仕へり後岡飛弾といふ岡越中と飛弾が子なり

○関ヶ原の時大坂に舟手村上彦右衛門菅平右衛門九月十二日

の夜葉名小忌十三日諸將は對面し安國寺に向ひて味方陣所の体見及びしる下心得らまふと安國寺吾もよこそよひひしよと関東者一人は上方勢十人の積とあれを四五日のちころんまは必勝べしと各ふ村上味方山どりの有様高くとりあがりまむなり戦ふべき色よあらびとく下アあ事も叶ひごかかん東勢ハあ陣所あつと一兩日を過びて合戦あかん覚束なりといひく帰るが果し計あり如く村上ハ敗軍の時阿濃津九鬼大隅守嘉隆の許よめた夫より上方小ねりり

○関ヶ原北軍の前有馬豊氏大垣と川を隔て陣せし小豊氏の兵土方三九郎を始十騎川を渉り敵少しゆを退

立大垣の矢倉に下り馬を立くおろく名乗るまは弓銃
炮を携へしり三九郎左の肩先より負ぬ續く味方もな
らまは十騎の老どもをばつくと馬を引返りしきり

東照宮へ関し召しなかり

賞功いふかりしは土方固本一右衛門渡辺佐左衛門
上田丹波と言合せお奔りしと土方が養母を百姓のゆと
は隠しを豊氏番人を付く守らしめられし
は三九郎歸りて養母を人質にめししれし上ハ
かくの事を中へ及び腹を切んとし豊氏尤ありと
てゆるさしめくわりの如く仕へ居しりども同く立去し
のちのちを有とて養母を打具し又お奔り加藤

清正は五百石より仕ふ豊氏かまはまはつらば落ぶら
年月を経る西の外舅中内惣左衛門といふ者豊後より有
てまゝたきしり中内ハ長曾我部が長臣なり大坂の事
起るよ及く長曾我部といふに大坂よりありしりば
三九郎も打具ししり元親を二つに分け國沢掃部
と土方はつづく三九郎此時六左衛門といひたり五月六日
は矢尾の堤森有所より東より向て押くる時朝霧は物
色定らなれ森の南より紺地より白のち付しり
をおり立敵を来る堤せはくまを引かして
立る処は敵ハ藤堂の先陣より旗を堤の下よりおろ
しを見く敵ハ逃るといひく馬より飛り突てかき

を元親大音^{モトチカダイオン}の槍^{ヤリ}を横^{ヨコ}に持^{モチ}引^キ付^ケて突^{ツキ}崩^クし一人
もみどりふかざるべく[〜]下^シ知^ルし十分^{ジウブ}の敵^{テキ}を引^{ヒキ}受^ケて一^{ヒト}回^{マヒ}
どろと起^{オキ}立^{タチ}ま切^キ崩^クし追^{オモ}討^ツまし[〜]る[〜]所[〜]は渡^{ワタ}邊^ノ勘^{カン}兵^{ヘイ}衛^ヱ
来る六左衛門[〜]散^{サン}々[〜]に戦^セひ鎗^{ヤリ}もゆがみたるが後^{ノチ}は敵^{テキ}の鎗^{ヤリ}
を奪^{ツク}ひし[〜]たけを[〜]か[〜]る[〜]所[〜]は元親^{モトチカ}先^{サキ}陣^{ジン}敗^{ハイ}北^{キタ}
掃^{カモシ}込[〜]も討^{ツク}まし大坂[〜]の諸^{シヨ}陣^{ジン}皆[〜]やぶ[〜]りく[〜]バ[〜]三[〜]里[〜]計[〜]の間[〜]
援^{タス}くべた味^ミ方^{カタ}もなく元親^{モトチカ}も久^{キウ}寶^{ホウ}寺^ジをさ[〜]りて引^{ヒキ}退^{タヒ}き
く[〜]小[〜]勘[〜]兵[〜]衛[〜]門[〜]志[〜]と[〜]ひ来[〜]り鉄[〜]炮[〜]を指[〜]か[〜]く[〜]三[〜]里[〜]が間[〜]
く旗^{ハタ}竿^{サテ}を折[〜]る[〜]打[〜]折[〜]る[〜]ま[〜]でも旗^{ハタ}ぎねハ一[〜]ツも折[〜]ぢ[〜]と[〜]れ
志[〜]と[〜]ひ来[〜]り城[〜]を[〜]歸[〜]り[〜]落[〜]城[〜]の[〜]日[〜]元[〜]親[〜]僅[〜]に[〜]士[〜]
十二[〜]人[〜]打[〜]具[〜]一[〜]八[〜]幡[〜]の方[〜]は落[〜]り[〜]一[〜]六[〜]左[〜]衛[〜]門[〜]も從[〜]ひ[〜]し

元親^{モトチカ}汝^ニ等^トとく見[〜]よりおの[〜]ひ[〜]く[〜]は落[〜]り[〜]て[〜]い[〜]へ[〜]ども[〜]づ[〜]く
までも附^{ツキ}そひ申[〜]さん[〜]といひ[〜]くる[〜]を元親^{モトチカ}志[〜]ハ[〜]さ[〜]る[〜]事[〜]な[〜]れ
ども遂^{ツヒ}よこが為[〜]よ[〜]より[〜]さ[〜]る[〜]間[〜]落[〜]り[〜]といひ[〜]く[〜]ハ中[〜]内[〜]
一人[〜]と[〜]ま[〜]り[〜]く[〜]其[〜]餘[〜]ハ落[〜]り[〜]り[〜]六[〜]左[〜]衛[〜]門[〜]其[〜]子[〜]孫[〜]今[〜]
池[〜]田[〜]の[〜]家[〜]は仕[〜]へ[〜]く[〜]い[〜]へ[〜]り

○東照宮岡山[〜]の御[〜]着[〜]陣[〜]の夜[〜]小[〜]栗[〜]又[〜]市[〜]露[〜]は滞[〜]り[〜]御[〜]前[〜]は[〜]赤[〜]
谷[〜]々[〜]心[〜]え[〜]あ[〜]く存[〜]打[〜]廻[〜]り[〜]見[〜]て[〜]り[〜]は上[〜]方[〜]者[〜]何[〜]の[〜]も[〜]だ[〜]て[〜]り[〜]あ[〜]く[〜]は
と[〜]ち[〜]を[〜]や[〜]召[〜]井[〜]伊[〜]兵[〜]部[〜]は下[〜]知[〜]し[〜]く[〜]宵[〜]より[〜]菅[〜]沢[〜]次[〜]郎[〜]右[〜]衛[〜]門[〜]を
山[〜]々[〜]谷[〜]々[〜]見[〜]て[〜]帰[〜]り[〜]と[〜]や[〜]つ[〜]る[〜]と[〜]仰[〜]け[〜]り[〜]と[〜]す

○関ヶ原の時 東照宮岡山[〜]の御[〜]着[〜]陣[〜]を秀[〜]家[〜]見[〜]て[〜]敵[〜]の[〜]陣[〜]
形[〜]あ[〜]ら[〜]ぬ[〜]は[〜]夜[〜]討[〜]せん[〜]とい[〜]は[〜]れ[〜]し[〜]は[〜]三[〜]成[〜]か[〜]る[〜]大[〜]軍[〜]よ[〜]く

夜軍ハ利チたものなりとてやみくもを秀家後まで悔
まよこころもとくや

○関ヶ原の軍は廿九月十四日浮田石田軍を知り一色村は兵を
伏せ株瀬川を渡り中村式部少輔の軍兵は陣所は押寄て
鉄炮を打くる中村が士竹田五郎兵衛先がけし打く
出る有馬豊氏も陣所相なれば兵を打たれ竹田討
死し伏兵は射あつたまされ敗北し中村が士大將野一
色頼母白あらかけ栗毛ある馬よ崩れ味方をたげば
返し合せしる藪内匠引て通りくるを河をうけ何とく
返し合せしるやとくを藪あうかへり手負しりて川を渡
り頼母ハ鉄炮より馬より落しりて其組の士松村清

み頼母がころころみをとろく引たり退たれども敵追来ま
頼母が上帯を切刀脇指をうりとりて退きたり其後富村と
り老頼母が首をとる

其前の日野一色藪二人國清公福島正則等の諸將れ前
へ出岐草攻落され功名致さるもあくひさて此よ
アハ中村が老ども軍始仕らんとしひるも軍始ハされく
どもがころころみをとろく引たり退たれども敵追来ま
其中に正則目を見知り怒らるる左松のも仰らま
せしる事もありき式部事太閤より以来先陣を勤め何
の軍の功名とげんとかくはらまの御目みかげん

とひひーと我

浮田石田等が軍兵競ひうれば矢野助之丞金の團扇北指
物林文大夫と赤ほらかけく二騎面もあつてかけ向ひ進
む敵を追遊しし有根目を驚らせり赤坂の御本陣より
御覽せし井伊直政本多忠勝は御下知りく人数を
まゝとめし此を株瀬川のせり合とひて

○株瀬川より三成が兵勝よあつて進むる有馬の士稲次
右近鳥毛の半月れさしおもく殿しつらるを横山監物といふ
三成が士池あつて引組し稲次が後者助け来り横山を引伏
しし処は敵走りあつて稲次が曹をとり引仰く稲次より放
さんとさる時従者又助け来り敵を一太刀斬るかゝる処は

堀尾忠氏のあられ者とせまつて誤て稲次が手の者を切伏て
首をとる稲次ハ終は横山が首を取まり敵をも打取て馬を
静よあつてせし東照宮の御陣所は参りくるを御覽じ
て先は此陣のかゝりし敵は向ひし武者功名ししと
誰が老と仰有し有馬法印かゝりし有て豊氏が子の老
よてんとし稲次首帳を記しとるは行く従者を味方討よ
おせし其首帳をバ消て経りりしと云声を聞し名何事ぞ
と問せぬバ子細を申かゝる大軍のみよと合し戦ひよハ
味方討もある物よとぞ仰せらるる

其後稲次は六千石禄増典へらまじ八十五才嶋原の城攻
よ討死せしとりや堀尾のあられ士ども味方を討し老と

同くほろ預り居る口惜とせしうば忠氏の父吉
晴是を宍彼士をばあろを取返して別弓の足輕二十
人預けらまじり

○浅香庄次郎後左馬ハ奥州葛西大崎の木村キムラは仕へ其頃関白秀
次の不破萬作蒲生氏郷の名越山三郎と共天下テカは陶名
しる美少年なり木村家滅て石田イシダは仕へしうらうらが咎トガを承
る事の有し小株瀬川セセよりラシの皮比羽織を以銀の大釘の
立物打しる曹カトめし中村ナカノがむね北士梅田大藏オホシラが首を取
大垣オオキより帰て三成隅矢倉スミヤクラに居し下シタはゆりし勘氣を
ゆるさしとゆくと呼しる三成関キく能ヨクと軍志イクとゆい
りまバ又馳ヒキゆく三成が軍兵を引揚しり後小加賀利常トシツネ小

まのうまを奉公キコウしり

○林半ハヤシハ美濃安八郡青柳村アヲヤギの百姓ヒヤクシヤウなりしが石田イシダは仕へて
祿七百石使番シヤンきり石田兵を起すの時佐和山の城中シヤウに軍
兵を集め書院シヤウインより饗礼キヤウレイを行ひ吾ワレ今イマはる一大事を思
ひ立運チヤウウンを天命テノメ小任コニとゆい汝ナニも武勇ブユウを以てよ
頼タノむるあり其旨ミチを存して軍忠イクサチウありば賞シヤウハ功コウ小コよしべし
其約束シヤクソクの印インとて酒盃サカヅキを座ザの中央チュウヤウにゆりし時林遥ハヤシハルカの末
席セキより進シマりし軍イクサは修シユして一番イチバンハ知チりしど二番ニバンハかく
半ハナ分ブンとありし召メカしよとて其盃サカヅキをとりし飲ノミしりしれど
皆ミナゆるたふるまひよといひが株瀬川セセガハより一番イチバン首クビをとり
ぬ斯カシく両軍物リウケンモノあるまじし時稻葉助之丞イナハノタノシヤウハ金キネの切裂キツサキの指サシ

物ゆく秀家の軍士此殿し林ハ白志あ人のさし拵指て景
さぐり殿しりるが拵も本多忠勝が兵は向て只一騎輪をか
くろ有様敵ありともおはさるる体ありしと 東照宮御
覽してあつても不敵者哉武功は志は者ハあの武者の草
摺をいさげと仰有らり

○関ヶ原の軍此日伊藤長門守至孝大藪の陣所は石田使
を以てとく大垣は入る一所はたのまきまきといひ送りし
至孝大垣は移し西を徳永左馬助壽昌市橋下総守正舒志
しひたる伊藤金左衛門紫丸は蛇の目此紋付しをかけ
三宅平大夫と唯二騎殿しりるが十四五騎計追かけしり
伊藤大音あげ大事の殿は勝負なせそと云く引退く三

宅ハ馬より下立しが陣の聲は後く馬ハ口は解し下人を
ふみ倒してかけぬ歩立はぬ静退くは日ハ暮し
まわらざるよ正舒の兵市橋助左衛門追つてく刃をかけ鎗
を合せんとせしに三宅ハ昔より親しき縁ありり互
よそのあつを聞知く夜中難も知ざるよ行あひぬる
幸なまき爰まで戦やと何の功名有べきいさして立別
りり至孝大垣は入る三宅ハ射ましあんとせしむる
帰る来りく志うくなりといへば至孝悦んで鹿毛ある馬は
もた鞍置く興へ三成ハ黄金三十兩引出扱よぞ志しりる
伊藤ハ十六七のこほよと功名ありく赤きまぬぐひを鉢
巻とくまき敵例の赤まぬぐひ又出しりくと世よりれ

一者なりある時軍破まて川岸を只一人引退く時餓疲
まてるも敵一人腰ある兵糧をきふをかんまて斬伏せ
腹をさわく飯を取ゆ川水よひひく洗ひくお喰ひ陣
所よ歸てるとなり

○関ヶ原より諸將物見をさまうと馳歸りて敵或ハ八九萬
又八十萬計もゆらんとりふは黒田長政の物見毛屋主水
敵ハ一萬よもるゆらドとりふやどて 東照宮の御陣
あくやせば敵ハ大軍あまふ汝が弱くあやられと仰られ
しうバ主水兼て凡敵ハ七八萬ゆらんされども兩軍の勝
負を討てておのふはあまふ軍よ志ハ兵ハ幾程もゆら石
田小西オが頼切くる老ども彼是合参く一萬討よるゆら

一陣敗北せバ餘ハ戦をばりて敗まゆべりとヤリゆふ 東照
宮主水ハ敵の内通を知りて軍の情よよく通ドくるよと
感ドさせぬ御手づくる饅頭を賜てををみと檀よ有
て此を食してゆき後彼ハ本姓ハ何とりあやと仰有れば
かへより毛屋と申せバいやは北國の毛屋といふ所
よて功名せしゆき毛屋と姓を更つてゆきと仰有り
主水ゆ山崎源太左衛門は仕へ後黒田家よ奉公し朝鮮
よへ平安道の小川を渡せし時味方ハ端小渡せしやと
云くも小主水味方ハ川上をよきゆき子細ハ馬の沓草鞋の流
まてるあまふゆらとゆき長政充なりとて渡せしとゆき
主水後千五百石の禄なり此時ハ旗奉行ゆき合渡の

軍小いよりより長政の旗を以てし主水馬より
飛下り鎗の鐔を以て旗竿をうつむけ汝等りの旗を仰
けあバ忽切く控んと下知して岩巻とひる旗さりの強力
の老よ取分るかか戒め主水もさいつと聲をかけて押
立より又関ヶ原より長政の旗卑なる立よりこれ長政
あとの高た所より立よと下知せし主水進んぶる旗を退き
わごまゝ敵の勢ひを付けひるんとて遂に旗を立並さば
長政後よ此二事を賞せしむるなり

○黒田長政ハゆより石田と不和なりしに關ヶ原合戦
のあまきより立よる士十五騎明日の軍よぬけ候まじく
吾馬のどりより引よひく軍せよ石田とよをた組て討らん

と用意せしむるより石田の陣の前は柵あり嶋左近昌仲左
の手は鎗をとり右の手は塵をとり百人計引具し柵より
出くるは柵際より残り静に進み候りしに長政馬より下
立鎗を提てゆみ合はる處小菅六之介政利少し高き如ふ
上より五十挺の鉄炮を透間なく撥合よりせしむる先より
進んぶる敵手負く左近も死生ハ知れず倒れしにバひるむ
所を長政とらとわくより切くつさまさま左近ハ肩よりけて
そを退ぬ菅後より六千石の禄賜より和泉と称す長政筑前
の國領せしめて後関ヶ原より撰よあひ長政のかく人よ有る
軍より人々集り閑話しりしが石田が士大将鬼神をも欺
くといひく嶋左近が其日の有様今も控目のあまを在が如

と云々其^{モノ}物^カ具^クの事^{コト}を^シい^ハせ^テ更^ニ又^モ定^ムら^レば^シ人^トと
口^ク々^ク又^モい^ハし^テ其^ノ軍^ヲ此^ノ石^田方^ニ有^リける^士の^筑前^ノ小^仕へ
々々^クを^シ三^人呼^ビあ^ハり^テ問^ヒま^シバ^シ近^所曾^ノの^立物^ヲ朱^比天^衝溜^塗土
桶^ハは^ハ胸^ノ甲^ニ木^綿浅^黄の^羽折^ヲを^シて^シり^と信^ズる^人驚^カ
ま^まく^く近^所と^はい^はれ^る小^見覺^える^事能^ハう^後へ^とま^ま
口^ク々^ク事^ナり^と云^ヒ小^其中^ニ取^リま^シて^剛の^者此^ニ云^ハる^ハ
見^える^人ハ^ハれ^るも^もこ^の事^ナり^哉左^近が^引具^ハる^ハ
皆^さら^にし^りる^物あ^らく^七十^計ハ^柵際^ニは^シり^三十^計左^右ニ
う^らく^く塵^ヲ取^リ下^知る^有格^はく^く案^さる^小三十^人計^ノ
兵^も鎗^ノ合^へる^際は^さら^に引^取味^方を^しり^と追^うげ^ん
を^近く^引寄せ^七十^人の^老も^もい^くを^揚て^突か^り手

の下^ニ追^崩して^残る^者は^少く^討つ^るも^もな^りき^今多^シ
如^して^ハ誠^ニ身^ノ毛^も立^ち汗^ノの^味も^もり^かく^酒汲^つは^しり^と
心^安き^朋友^ト物^語も^もハ^大よ^くあ^らむ^や人^々大^く目^ノ
き^まり^ハ失^ひる^小若^其時^横合^{より}銃^を打^き
め^ばハ^らし^まる^首ハ^左近^が鎗^小を^しり^見る^人
と^て必^ずも^恥は^らむ^とい^はる^も

○関ヶ原より飯尾甚大夫安信只一騎思田長政の陣は
馬を乗せ大喜あげく名取をいざ討取んとしやりの
の若者ども進々を野口左益田典久と只一騎先延
志昔をいざ一れ谷の本戸口より熊谷平山が終夜
名乗つる体なり平家の士お合さりし志の老を助とな

るべしふやまきり付べきども夫ハ情なり後を以て鎗を
横へく制しこれバ飯尾度々名あり馬を引けり飯尾
ハ豊後國富来比垣見和泉守が兄利右衛門が子めて五千石の
禄もて秀家小奉公居りて

株瀬川の軍は中村北士成合平左衛門利忠牛の告れき
物あり真先かけしを飯尾討取り其後思回家小仕へ
千石の禄鉄炮預り小長政成合が首取りとて彼成合ハ
世ふかきまきたる勇士なり其首を取るとして三千石
増興へられしとぞ成合も中村家の士あり天正年中
秀吉蒲生氏郷木村伊勢守秀俊小奥列敷十方石賜り
ころの両家とも士卒の少きと困りて秀吉下知して日

本國中の士主人不足あり老た或ハ主人かまひ有面々
皆兩家より禄を得べし主人咎めバ秀吉相手しん
と私に書て立ちまじりて成合ハ和泉小木川の一番鎗を合せ
秀吉の感状賜りて一氏に三百石ありて
故木村が許しりて三万石佐沼の城代しりて木村が家亡
びく後復中村が家より歸りて仕へ株瀬川まで討死しり

○蒲生備中真令ハ石田が内みくすゆる勇將なり関ヶ原の前
軍評定の時真令明日ハ偏必死と思ひ定めらるべしと云
嶋左近明日先陣に進んで忠義を曹とて打勝つた扱とて
いへど真令まじり昔より利を得るハ天のたさけよよとて

とも軍の面したと法令の厳しきことの二ツは有りよく内小省
しるへ偏し必死とぞひ定められバ勝の半なるべし尤あはれ
ハ復御目見致さしとて座を立どり真令元より敗軍をさ
やうく三成は必死を究めし詞をせしり斯く関ヶ原ゆ
只一騎三成が陣はあはれ何事ありひりるふ三成うちうた
はく真令弛帰を競ひかゝる敵小向ひく散々し戦ひるるが
織田長益は合く昔ハ蒲生の家よく横山喜内今ハ石田
内よく蒲生倫中とて人ふあはれ者なりといへバ長益神
妙ふりしは降参せしといひも終らぬよこハ何事ぞやとて
お打し斬り打落さく長益の從者千賀文藏鎗を以て突
通を其柄を握り引組しるふ文藏が弟文吉刀をもちて

真令を刺して遂に打取たり真令が子の大膳ハ戦ふ半小首ツ
提て父は見せしバ功名も何よせんといふを聞又東小向ひて
押くる敵小かけ合せんとせしが父討まじりしは
まそそり我そそりて三ッ流川あさみ海もあはれせん
といふ哥を高らうふ唱へ自害しきり大膳幼より戯を好び
関ヶ原不出陣の時母は汝が富貴を願ふぬよハあはれも
弓矢の家は生るる所ハ昔より名を重んぶる習ひなり凡
物二ッハ兼がし身全うして名を忘まよとハ云べうは
いひしバ父と共に死して母の戒よせよハはざりたり
○越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆ハ會津征伐に從んとて
兵をゆきんとせしに石田三成より榎原彦右衛門を使ふ

て志ひく佐和山の城に來らまはし蜜に評議すべき事有
と云せしむるは此ハ心得どとつてども是非を論せしむけ
まは止事を得しめて佐和山よりなる三成悦で今度関東
を討亡びし謀をぞ語るる大谷驚て故太閤常は徳
川殿の智勇に備はるるを崇敬せしむるは今徳川家を
打込ん事おひひもあはれびといひまはし三成我上杉景勝と討
て系務旗を揚らまはしり其約を變じて景勝一人を政殺
させん事本意は非ど運を天命は任むるの外道なり豊
臣家の恩を厚く蒙らるる身なまはし秀頼公の御為にか
く一大事を思ひ立しむるぞうりなご豊臣家の恩をこそしれ
らまはしやとつて大谷さくば力なり命を秀頼公に奉りて

今度の軍討死さしめし但かゝる一大事を思ひ立しむるは
思慮さるる事二つ有申知して人用ひらまはしやといは
三成いふ所存を防ぐべしと悦しむ大谷が曰世の人石田屋
をば無禮なりとて末まはし至てもらるるよかゝつていひあり
江戸の内府ハ只今日本一の貴人なまはしども卑賤の者よ知ま
で礼法あつて仁愛深し人のなつて従ふ事大方なり是
一ツ次は大事ハ智勇の二ツありてはさけ得る石田屋も
智有て勇足さるるうとほむ今度毛利浮田も皆かりよ同意
しむる人となり必しを頼むとすべしなほは水口の長束
と討て内府関東へ歸路の時石部ありて旅宿の時夜
討して火をわけ十死一生の軍せば勝利疑なれはあはら

圖を外されぬ内府関東に歸らざるハ虎を千里の野に
をならし如し十全の勝をえらば又圖をさぶら
悔むも益ありト此上ハ命を秀頼公に奉るの外他の道な
士卒ハ皆平塚に下知せしめしめバ其志計がごと
いともよも別の事ハハハとして伊益の驛に至り平塚に告
もバ平塚大に奪りて三成志大なりといへども大軍を率
へば將畧なり然るもふかく興せしめしめハ禍をまひ
とつていふも既し許諾せしめしめバいんとも
さべりいふとして三成が送る使者ハ心得ぬと我
答へたる吉隆敦賀不帰し不関東勢岐阜を攻落しと
て敦賀を打ち関があらむりて秀詮の裏切をの

より悟りてれば僅小六百餘の陣を一手にたの関ヶ原に
おし知し鎗衾を作して秀詮に向ふ吉隆ハ目を病て士卒ハ
皆平塚に下知せしめしめ練絹の小袖に上小村蝶を墨して書
し鎧直垂を以て四方取をれし竹輿にのりし秀詮
裏切して討つたられし大谷齒をかく秀詮の不義骨
髓に徹せり敵の旗本を目小かけく切つ入屠しと下知
たすバ木下山城も大谷大學戸田武藏守重政平塚因幡
為廣を最後とすひ定め面もあつて切つたつり
バ秀詮の先陣立足もなく敗北してしめしめ藤堂高虎を
始め東國に軍おしけ進み来もバ秀詮の先陣あり
死狂ひし鋒先は秀詮の先

陣又追立らまじり為廣敵あまき討ぞり其首を吉隆
よ送り此首自ら討取以冥途のつとふ糸くせん日比の約
束只今討死しゆひなんしく自害して人あふかれざま
と云せハ外は歌一首書添しり

名のこまにまじり命ハ惜うじつひよまのぬうた世とあハ
一説よ秀詮の士横田半介を討取其首を吉隆よ送り
ともいり

吉隆使小向ひく武勇とらひ和歌といひ感ふともい
とや自害して追付再會さべると各へく甥の祐玄といふ
僧小呂しを書せく使不渡しり

終りあハ六のちちふ志りまておれえんころふあり

かゝく平塚ハ戦ひ旁まじり畔に腰かけ息づく如よ小川土
佐守祐忠が兵榎井太き鎧を提歩きまゐる平塚立上り
我ハ平塚因幡守なりとて散々よ戦ひくまが終小倒きたな
が十文字の鎧を投出し汝が重宝よせよとて討まじり
戸田重政もあまき切り討死しりりまじり大谷が軍
敗まじり吉隆自害しりり行年四十二歳とらや岩佐五
首を羽織よ包く其邊の田中埋く先手よ向ひ討死し
るを藤堂の士大将藤孝仁右まじり其首をとりて御旗本
よ奉りまじり東照宮五歎ハ聞ゆるもの之缺唇なる屋
しと仰有りまじりお志りまじり

○滝川内記辰政ハ左近将監一益が末子なり秀詮よ仕へ

松尾山より秀詮の軍敗北の時、みづから敵を支へて
従者首五ツやらせ秀詮のゆへ持せたり其所をさきで
吉隆が兵は鎗を合せ岸より下は敵を突落し、山田
喜内其首を取敵を驚ひかりたるを笹地兵庫と俣
散々戦ひて首を取ると後池田の家は仕へて禄三千石
士大将より此軍の時北四五計の年や

辰政其始織田上野の信包は仕へて十六歳の時小田原
の軍不信包織田常真は對面せんとして後者を遠ざけ
辰政只一矢を具しておもむき、江川の丸より
横筋うひは鉄炮をおかると辰政信包の矢面は乗ぬ
さぐりゆゑあらは鉄炮の玉三ツあつて信包大に感

賞して勝ぶるをあらへらる辰政此時七郎といひたり
池田家は仁へて丹波と称し又出雲と改む

○関ヶ原の戦ひ九月十五日辰の刻るまで、東照宮挑配
は御旗を立ちまつる、本多三弥正重来て今少先へ
御旗をすゝめあひあはるべし是ハ敵合遠しとやを聞き召口
こゝたの黄あゝる男よこいをれざる事をと仰るも三弥御
後の方小より口よりたハ其あゝるもせよ遠きハ遠しとひり
ぐとやたり

三弥ハ佐渡守正信の弟よと若たは武者修行してな
功名は長篠の後ハ瀧川一益のゆへ有つてこの軍
よや諸浪人皆よとた有し三弥はあはたりと

一益さうもあまき高た人の今日れ事ハいふと云此
ハ明日こそとて其はけの日首二つとつと昨日の答是あり
とて甚風流を好し物数可いやげなる事たう
常不身は薰物をと免り前田家もも志むく有
慶長元年伏見うく 東照宮小仕へなりたる以の外
小直言あふ人なり或時幸若八九郎を召ま高館の舞終
了く後武藏坊辨慶ハ世小まてぐれたる老あり今此世
なうべしと仰有し三跡兼て今の時辨慶ハ有べし
とも判官に似たる主君のなまどとやせしなる大坂冬
の陣 台徳院殿に仕へたりたる 東照宮三跡ハよ
くまひる老ありと仰有し其後一万石賜たり

東照宮御前より召出されしは思慮したるや人ぐを
さうあてす終るよりすうと仰有し三跡
將軍様ハ仕へたりしあのことた主君小すし老と
きらうひもてゆへとやりたるを又持病たりたり
と笑せめひりしとて七十二歳元和二年病死せし
○同日時祐筆握左馬助かみく御書を九月十五日の日付
今日巳の刻御勝利と認置たり 東照宮御感有て十五日
とありしハ尤あて巳の刻とハいふ左馬介兼て敵ハ大軍
なり巳の刻をるる御敗軍と存りたり
左馬助ハ上田善四郎と四男ゆく禄四百石後千石賜り
て御使番たり

○田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳より関ヶ原より従
者敵を突伏田辺を馬より抱おろし首をこきせりと
幼少より武功世より名高りこれバ黒田長政田辺より
大小感賞一田邊をとりくひし従者を味わし其事を
向ふ馬より抱おろし小刀を抽出し其事バ恥
志めく首を取りと云長政さてハ勇士なり。あふは保
かりとバ十方あきあきとつべし恥あらまて首を取
るハ勉めむげまほより勇氣を致しななりとて弥々
めくまきくす

○辻小作ハ福嶋正則より仕へしが可児才藏と親しく共
よ世小作とく物となり中黒道隨ハ石田寛客の如く

りてなり。至る関ヶ原の軍敗し時中黒唯一騎落初
兵の中一踏止りさんく小戦ひくを過見ていさ付さ
むやといハバ可児たるけあは事をもりあとの裁きすけ
むやと云過さしてハ生とまことや可児は好まれて辞し難
といひすて馳初る中黒馬を深田小打入く諸鎧
を合せて更不動は辻詞をうけ日頃のよみ助んず
よ早く取付とく鎧の縛をさし中黒思かるまハは
命助りても何よせんとして既よ自害はく見えくは
辻何とたバくまや神明小うけくいつらとていへど
どりつきしは辻主後引あげく陣所は歸る可児見く
大は脱びどりさして辻ハ物具脱て髭みたり仰は打目く

只今まで敵たりし中黒を物とも思ひぬ有様まで物語に
中黒あらず不悔^{アハ}しむるも心中^{シナク}よりいりなまじき命^{イキ}を助
けしりし恩^{オン}を思ひくさてやぬと後^{ノチ}に中黒^{ナカクロ}此事^{コト}を語り
て後^{ノチ}に中黒^{ナカクロ}後^{ノチ}井伊直孝^{イナホタカ}招きて祿^{カネ}二千石あり
らしむるなり

或^{アル}説^{セツ}に丹羽山城谷^{ニハヤシヤ}少羽^{シウハ}篠野才藏^{シノノノサウザウ}稻葉内匠^{イナハタウヂ}中黒道^{ナカクロミチ}
随^{ツグ}渡^{ワタリ}邊^{ノヘ}勘^{カン}兵^{ヘイ}衛^{エイ}辻^{ツジ}小作兄弟^{コサカケイテイ}の約束^{ヤクソク}して武勇^{ブユウ}を勵^{ハゲ}
天下^{テンカ}七兄弟^{シチケイテイ}と云^{イハ}ふ

○関ヶ原の軍破^ヤまりし時^{トキ}鳴津義弘^{ネイツギヒロ}真丸^{マニマル}不^チ成^チて福嶋^{フクシマ}刑部^{ケイブ}少輔^{ショボ}
正武^{マサタケ}の陣^{マタ}北^{キタ}前^{マヘ}を切^キ抜^キんと一^{イチ}文^{モン}字^ジはね通^{トホ}る正武^{マサタケ}十六^{ジュウロク}才^{サイ}か
合^{アヒ}せんとす^ス処^{トコロ}を梶田^{カキタ}又^{マタ}右^{ミドリ}兵^{ヘイ}衛^{エイ}死^シ狂^{キヤウ}と^ト敵^{テキ}不^チ軍^{クン}ハ^ハせぬよと

追留^{オシロ}し東國^{トウクニ}勢^{セイ}おろけり久義弘^{キウギヒロ}の馬^{ウマ}れかへし乗^{ノリ}多^タくさくやく^{ヤク}体^テなりしやが
て大敵^{ダイテキ}おかけ合^{アヒ}せ討^{ウチ}死^シせ義弘^{ギヒロ}今^{イマ}は是^{コレ}までたかりとて取^{トル}
返^{カエ}されり阿多^{アタ}長^{ナガ}壽^ス入^{イリ}道^{ミチ}成^{ナリ}淳^{ジュン}義弘^{ギヒロ}の馬^{ウマ}れ前^{マヘ}は折^{オリ}あき
がり大將^{ダイシャウ}八千騎^{ヤチセンキ}が一^{イチ}騎^キはぬても死^シせしめて謀^{マク}をめぐ
しむを道^{ミチ}とす^スとく打破^{ウチヤブ}し引^{ヒキ}退^ヒたるといふ
まゝ小馬^{コウマ}の首^{カビラ}を引^{ヒキ}直^{ナホ}し鳴津^{ネイツ}兵^{ヘイ}庫^コ頭^{カウ}最^{サイ}後^ゴの合^{アヒ}戦^{セン}をする
そと呼^{ヨバ}なりしとさんく小戦^{コウセン}ひく討^{ウチ}死^シしる成^{ナリ}淳^{ジュン}が義^ギ弘^{ヒロ}を
よめしむるふしり支^サへ我^ガひ討^{ウチ}死^シせし者^{モノ}多^タかりし其^{ソノ}ハひまふ
義弘^{ギヒロ}又^{マタ}士卒^{シソ}を集^{アツ}め列^{レツ}を整^{トビ}へ引^{ヒキ}退^ヒく時^{トキ}松平^{マツヘイ}忠^{チユウ}吉^{キチ}井^イ伊^イ直^{ナホ}
政^{セイ}あまのすなはて追^{オシ}けり義弘^{ギヒロ}が兵^{ヘイ}ども種^{タネ}々^{カサカサ}鳴^ネの鉄^{テツ}炮^{ポウ}

を腰に挿し、と抜出し、ひびくと折るを打つけ、忠吉直政共は身をくちられ、おろしき、おろしき、

一説は本多忠勝追うけし、馬を銃炮、せ馬より

落し、バ梶金平馳来り、おのぐる小忠徳を奪、其間

島津が軍隔し、とり又河上左京が後者柏田源藏が

うち、銃炮は直政中るといへ、又松田某といひ、

陣の時連て帰り、小児の成長、と組、有る

角の角れき、おの曹、兵部は、下知、

銃炮をさし、向し、直政眉尖刀を換、馬を奪、

けし、彼兵松田某と名乗、小眉尖刀、

其玉腰骨、おろし、馬より落し、おろし、

て後薩摩の、直政を襲、せ、小直政松田を

呼出、盃をさし、関ヶ原、既、死、

幸、今日對面、事を得、とひ、後、

片足、武功の人、小禄、不足、

日の、小禄を増、彼物頭、

は直政の呼出、對面、及び、時の、

一生、覺、といひ、

義弘、近江の甲賀、老翁、一人、案内者、

せ伊賀の山路を、上野まで、行、

守定、次、城、なり、使を、嶮津、

と送り、野武士、四五百人、

山の中、待つ、

義弘物の数ともせだ打破里二人生捕く上野小立歸り大
手の柵此木よかめ付てそそり奈良よかかめ老翁小
ハ刀よさう添らまう赤銅の糸并を何れ此をさうし必薩
摩よ来ま今度の旁よ報せんともく大坂よ至り船よ鹿兒
島よ歸らま

一説よ尤近丞と云姓薩摩よありそハ慶長の比大坂此商
まく年久しく薩摩の采をいさあひける共あり関ヶ原
破まて後義弘大坂よ着ま士一人先まかめ商家
よ行らバ彼商待りびりて体まく君ハいりまあり
ゆと問ふいざと討死ありと答へるまバ商家涙を
流一年比厚恩を蒙り事なまバ関ヶ原破まぬと関

より必爰よこころせらまんと相計りて船を設けく
待居らまかひもたなく口惜き事なりせめく御佐よ
まんとて水中よ飛入んとせしをわ留め今の時なれバ
人心のまうり難くかくいひあり実ハ一方打破く
爰よおのせりたりといんむかく物まハ恨なまこもそ
まを云んよハ時移るべしやま舟よのせらまん松をこ
そといひも終らぬよ義弘来らまら酒樽を積其間
よかくのせ其身も付添く直よ薩摩よ赴し其者の子
此中一人薩摩よ仕へ其子孫なりといり
彼老翁薩摩よ行むやとおのども道遠くまバ空しく色
し不程ゆる人小いさあま鹿兒島よめく并をわけ

まばなごころく来らざうしどとくさほく響一黄金五
百枚あゝいざあひ一人も黄金あまゝ興へく人を添
くたくりをさまをり

○関ヶ原の軍敗まうらば金森法印とく勝関の儀式行ハ
まほハむやとを東照宮諸将の武功よよりかく敵
をバ打破アも諸将の妻子大坂人志ちとなりて
敵の中よ有此を事故なく帰一興へざらん間ハ心安
んぜだ勝関をいで行ふたと仰らまを聞く人愈感
服しるるごと

常山紀談卷之十三終

常山紀談卷之十四目次

- 一 細川忠興の北北方義死の事
- 一 安養寺門齋三成を生捕んとせし事 附 姉川合戦の時門齋
生捕と一事并遠藤喜右衛門討死の事
- 一 大津城合戦京極家の士戦功の事 附 赤尾伊豆が事
- 一 十時傳右衛門山田三右衛門死骸返一の事
- 一 高次大津の城をゆゝ事
- 一 立花家足輕鉄炮の用意 附 細川家口菜入土田大藏掾の事
- 一 伏見落城の事 附 鳥居忠政雜賀孫市を食まし事
- 一 村上三右衛門大島源二武者振の事
- 一 三刀谷監物田邊城よ籠る事

田邊城 勅命依り和平の事 附 細川幽斎古今集傳授の事
古田助左多思慮の事

常山紀談卷之十四

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○細川忠興の北北方ハ明智光秀が女たる父謀反の時忠興は
向ひやされたるハ父あがりかゝるくたゞて事よくたのむべし
ともおもえれど滝川柴田などヤ人多くまじり必軍敗まらん
魚ノ女の浅た智慧より口をくくこそ存けし男の身あらん
まは鎧此袖よまがりても誅めやべきを力なり君あり其
まよせむひちるバ世の譏いうぐりのがまきませありんと涙は沈ま
まじらば忠興光秀は同心なりりり其後程経て秀吉
伏見よ有る諸大名北北の方を呼入る食まじり事のまじり
お忠興の北北方かゝるくたゞて女の人たゞく一間よ入る他人

まゝの事やあるは召まんとならばとて懐よ七首
を用えせしきり此より秀吉の悪行ハやとてり石田西
國の諸將をかゝりひく兵を起す時諸大名の北の方を
大坂城中よ取入んとすを北の方で傳は付らまゝ河喜
多石見稲富伊賀小笠原正齋を呼ぶ吾此所を知らん事
名ひもあゝぞ城中よ取めらまゝハ恥辱なりよく断を
ゆへに咄入らまゝハ是を限と思ひ定むべしと語られ
正齋殿東國よ向をせまひ一時おのひくけざる事あ
まハ正齋をひく武將の恥なすこと仰せまはひき
敵奪ひこんとするなれば其時思召切せめくとやしきり
かゝる処は城中よ入よと使を以てりせりハ再三断の旨を

述べたれどもす入は七月十七日の未刻をりり大坂の軍兵五
百餘り玉造口の屋敷をとりまたとて城中よ入やされ
よはゝとて入乱入と奪取んと呼りり女房たゝあはて
泣悲めども水の方ハさうく色もたなくかくあんとハ兼
ておのひ設つる事ぞとて正齋ハ錯せよとれ生る世ふまみ
えぞり〜人〜小死〜その後も見らまゝハあ〜とて面よ
覆面おけく〜を袴着〜刀を抜胸よたた〜とられ〜
うば正齋眉尖刀よ〜ハ錯〜其のく〜とて腹を切んと
せ〜処よ正齋が小姓〜と来て殿の北北方と同よ自害
あ〜後の誅のべきと云れば正齋あまりのい〜とふ
こす〜よ〜障子の外よま〜りお家よ火をあげ石

見とけり腹切く炎の中は死しつりて伊賀ハ光秀より
附らまじり身あれを遁るべたきもあはれ人ふまたまじり
落うせたり

忠貞後よさぐしおし誅せんとせしむるを松平忠
吉伊賀ハ無双の鉄炮此妙もあまきバ助けなき若ものよ
教へさせんと志ひく乞まじり忠貞力なきし止り
伊賀ハ世の六文もあき髪をそり一夢といひり百發百
中のもたきなりし人も人多き申すてハ大まき
めのと申らさるしとぞ

忠貞の北北方かきかやわおしつらんおはれ
きすて硯の中は入らまじり哥よ

先づ川ハあしつたりの命ゆめあつてつた契とを忘れ
落ゆる女房の取傳へく世はあつたつらん水の方ハか
てかくあつんとおしつらんば幽齋の妹年老く宮川殿
とせし忠貞の北北方前田利長前田利長の妹と小吾ハ人志ちるらん世
の物いひれはあつた落失たやと存るて同くあつた
べりれど人多くてハ中くうた目やんあつたのゆらん
隣の築地一を踰る落させ多くやとて宮川殿ハ建仁寺忠貞
の北北方ハ浮田秀家の北北方ハ忍び行く此禍をのがま
し誠義烈のあつた謀もあつた人ありと
語ア傳へ袖をぬるぬ人もた

○三成兵を起す時大津の城は入る京極高次は對面し除

秀頼公の味方有べしとぞヤク高次の士は安養寺門齋と
云く者黒田伊豫より向ひ今三成城中に入る事誠の天の命
ふる事なりかめ取く関東はなると云思田守三成
を生捕とも西國の諸將大軍よく攻囲むべしゆく防ぐ術
のあるべきとて関入に門毎あざ笑ひ三成は怒るハ乱の首
なり其陣ハ手足のぬき首を碎くやどなきハ手足何の恐
のゆべたきと人かききりとも固くもりて戦ふべし軍せは
して三成を生とるあは天下は名を揚勲功難うあらぶべき
吾年老ぬまで三成をかめん事ハ事とやとくんとく
今村掃部をも勸しゆくも争論は時移りて三成城をよ
りり門齋ハゆと浅井長政は仕へ姉川の軍小生とくも龍

鼻の陣よく信長の前より引かぬ信長の曰く勝は争て小谷
を打破らんと思ふハいよく小谷が命を助けあふ此勝敗いなる
べたと向く小安養寺も兼て長政が父下野守小谷は有る
其兵三千計りやれひあふ然る小疲まする兵を以てか後
がらよく攻らまはらん事然るべくは信長おろす
いよく取く首ども知して安養寺よりんせし其姓名を
向く中も竹中久作が取く首をいよく遠藤喜右衛門直
継とく老よとくいなる有松よゆいしと向

久作ハゆと齋藤家の士信長よ奉公しゆく姉川よ浅井
の士遠藤喜右衛門直継云くハ信長昼ハかきくちり夜々
横山の城を攻信長北本陣龍ヶ鼻を一夜討せハ勝利疑

かゝるとりよ長政長を用ひむぢあうかゝる國をなぐして
浅井の家危き朝夕は有り軍敗まん時信長を討ん
者ハ吾なりといひかひつる刻たがらず首を刀の鋒
よつゝぬた大将の實檢よそたへんと云く信長の旗本よ
来アをを久作討取し久作かきて必遠藤を吾討取
んしと人ぞあうりあるあぞと向小其子細二つ
あつゝ江州より遠藤と相知よく足知り是一つ彼ら
つゝ剛の者少て力あくまですまうり常小進む先
づもく退くは後る是二つといひが果して直継が首を
得しり

竹中聞く首一ツ提殿ハいづこよまうまぬぞと云てちづき進

こ来しもの敵のまぎれ入る殿を切奉るたうんとといひ
引組と討取しと誘りくまバタ初大依山より軍破ま
ひあゝバ必生く帰らど信長を一太刀恨まゆきんと遠藤がい
ひつるが果して其調めくなりきとよ

遠藤ハ浅井家よ名有る剛の者なり信長江州佐和山
より始めく長政よ對面あり公方義の歸京北次小佐
木承禎を攻打べき事を裁し長政も力を合まきよ
の約を定め岐阜よ歸らうとて江州柏原よ宿せし
浅井縫殿中嶋助九郎遠藤喜右衛門三人弛走の為柏
原より行が遠藤早馬より小谷よ歸し信長を見り
武勇極めし謀きくました人なり浅井家をくめ

がへば事務ひたり今日決断せしれり臣信長を
 刺殺し申す其勢ひよみて美濃に攻入らばと云
 長政は一度約して変せん事本意は然らばとて信長は
 直継再び柏原に赴き信長をめてたり信長無事な
 岐阜に歸らざり直継常は是を悔むるゆゑ姉川
 一々独らんで信長を討んとす

其次よせざる首をよみて是は安楽寺が弟よと彦六甚八
 と申す者よて死に死に所と笑ひて先づとつ事こそ口
 惜しむとて首をよみてはらまはすとて其後ハのをもいひ
 かゝるは秀吉其比ハ藤吉郎と云はる栗毛比馬の汗りき
 とも小諸鎧を合せ白沫かきせり馳来りいざ小谷へかき

攻破るべきたとていひしは信長いやはよかろく軍ハあぶ
 かりとて討たるるて秀吉後悔あらんのを急がせんと
 強まらば信長は入らざりてさして止り安楽寺ハ只首をよ
 りまはすとていひりては吾も奉公せりてさばくたつめ
 つかれりては降参せり遂よゆるまて小谷は歸らざり
 安養寺よせむらりて信長軍を返されり浅井三
 年経と小谷の城落りり其後安養寺浅井と京極と一族
 たり故高次は仕へりて若き時三郎在陣しとてやなる
 ○高次ハ關東よ素素より心を害らまはるを大坂より朽木河
 内守元綱を使ひて秀頼公の外戚とて江戶大納言
 殿中もゆりのあまき人疑を散せん為よ幼息熊若丸

を人ぢちふゆさまにへとまり高次からくく敵の
色をも立ぐくして止事を得て熊若丸をゆして北國小
軍を出しきりて岐阜の城おちりてをゆして北國よ
向ひしる人々大垣をけりて引返さまじり高次の庄
より直に海津よかり九月二日の夜半は天津小歸立
花宗茂筑紫廣門粟津の陣せしを夜討せん謀られ
小畠田伊豫回んせりて止めさるるに關寺の門を
閉城下の糸の糧を取入るる防禦の支度せしきり宗
茂廣門石部より引返して勢多の陣取輝元の陣代毛利
元康等八三井寺の陣久苗米秀包南條中務を始り
て三万七千餘四方よりおちりて中めも宗茂の軍兵ハ

ちげし攻めく死人を多く越て乗入んとし防兼て
京口の旗をたむけり多賀出雲守真先かけく堀を
打破して三の丸の関を作てかけくひびくとお入り山田
大炊赤尾伊豆足輕頭ハ井口左京大橋肥後安歩は門
毎使番山田三右衛門横山久内田中茂兵衛茨川口を固め
るよ京口より敵亂入しは二の丸をさし引退く高次使
を以て何とく三の丸をさして早く二の丸へ引取るや仕事
城付らまはば防ぎぐかまへりやく敵を追せと下知
せしきりしは門を閉り切るる山田大炊十文字の鎗は
鐙を片手よまろく曹の上よくりおちりてあつとゆり
急ぐ一番の鎗を合せ敵二人突伏しり此を山田大炊が

茨川口の鎗と世は称し、赤尾八狸を皮の羽折を以て長
身の鎗もく数人突伏せ山田三右衛門もあつて戦ひつるが
討死せり二の丸小引たる時山田と赤尾とかりし、六度まで返
し突拂ひせり殿の振也目を驚し、二の丸北門陥りし
赤尾山田已下ふと止りし、射唯少毎門をきて関貫をさ
し赤尾ちつともひるまは長身の鎗をかきつる、二の丸敵の方
へ足を投出し草鞋のひもを結び直して其武者振を敵え、
少一きあらし、時少齋門を突げ、中又入事を得し、赤
尾棄殺し、少一きあらし、時少齋門を突げ、中又入事を得し、赤
丸小攻入んとする、あまこそ門をさし、くれ各を助ん為り
城の危き志も、ふもやといひ、少一きあらし、時少齋門を突げ、中又入事を得し、赤

よ詞たくりし、黒田次郎兵衛、尾子宮内、安養寺長門三
田村安右衛門、今村掃部、赤尾久助、中井民部、小豆掃部、油井周
防等、八京口を防ぎ、二の丸へ攻入、敵と戦ひ、討死せ
くまう、鉦子五郎兵衛、八始関白秀次、奉公せし、あま
まで酒をすすり、ある時、朋輩は、後り、あるハ殿下のかん
よ立置、白熊色、白く丈長、あれ曹の上よ、みぞ
かけ、軍の先、げせん、抽を、といひ、秀次、つて、鉦子を
呼、是を、肴、酒を、吞と、く、彼、白熊を、あ、へ、ら、ま、う、は
鉦子、あり、が、く、存、い、せ、ハ、む、ま、う、ヤ、セ、し、初、ま、う、め、き
ま、く、い、や、らん、若、此、後、軍、の、い、ん、時、先、よ、ヤ、セ、し、朝、を、い、ふ
せん、といひ、き、る、今日、栗色、の、志、不、革、よ、金、の、筋、つ、け、し、我

羽折を忌かの白熊此雪の如くあるを曹の上へ
かけ十文字此鎗を横へ尾関甚右衛門と共に乱れ入る敵
五六人突伏し曹の鏝を傾け一足も引まじいぞと呼り
討死ししりりと事君ハ異あまきども賜ひし白熊よて
敵味方の目を驚し討死をぞ遂しりり尾関ハめ柴田
勝家ハ仕へが後高次北國より歸らまじし時尾関を迫
づけ夜酒を酌し蜜はけやうまするハ吾石田ハ興し
あつる歸りし大津の城をもちらんと思ふなり敵の
小勢を以て軍せん事尤うた事なり汝が智勇を頼
と語らまじし尾関涙を流し人々いづらも何し思
召まじし斯仰りぞや此上ハ二ツたのこ答へまじし高次汝討

死むべきやしが為し命を捨んとおりの老多けれど謀を
トくまする者稀よこそあまき汝偏し討死とのまおのハ吾
志ハ非むといまじし尾関かく身はまじし御詞を承
アハ骨をまじしもの堪がた事有りし此恩は
報しなまじしといひし此時鎌子と俱に戦死せり後高次城
を破るまじし附赤尾と山田と高次の輿に左右は供し
をんまじし寄手の軍兵指をまじしの大膽者よと云はり
一説は伊豆茨川口の敵を追拂んとし出る附跡をバ
弟の久助内田太郎左衛門多賀孫左衛門守りしを
寄手まじしし攻る久助手負く吾ハ本丸より退んと
いふ内田も何は昔熊谷が子の直家よろすまじし

バ討死せよ痛手なつバ自害せよとゆひし事弓矢の
身の詞たり爰を逃んと六口傷を事よ大剛の伊豆が
弟は汝がめたる人此有るこそ怪しきこと罵りしあり
内田八銀の馬櫛を曹の立物小志くも銀の馬櫛よと
あめりるあどれ物師あり敵今村掃部が持口を破りて
乱ま入しバ伊豆あり見たり三の丸はこれれとて
引返はんと敵既攻入り入る方なり京洲の丸よ
入るやとつて伊豆少もひるまは初出する所あり
入らんこそやとて伊豆少もひるまは初出する所あり
豆は後ふ者四十五人下終ハ皆逃散く伊豆が若黨一人平
野藤三郎と云足輕一人残り留まり伊豆むら立する

敵を物ともせは蜘蛛十文字に追立さんぐよ戦ひ
くも小敵尚烈しく進みまうくバ尾関甚右衛門鉞子
五郎兵衛二人土橋の上より合せ大音あけく存る
細うりく討死せよと雲をよき首をとめてて面もやぶ
切死よぞしりり其ひきは赤尾そのをこと行きて
城際に至る門の外に柵は簀戸あり赤尾簀戸をメよと
いへを平野勢ふ簀戸をメり門を関りしひりバ
少齋法師武者より門を固めくあうが矢倉より
味方とは知しと敵付入るは一人ハ軽く城ハ重し
爰こそ死せよとまよきまよきとやうに討死せよと是よ
見物せんといふ赤尾石よりかりく息をつき九尺計

ある鎗を下に置き脚のひもを結び赤と敵篋戸を
破り押し寄せるを八十餘人の兵ども爰を限り面も
あつて突くる赤尾をづらふ緒をメテ終つてつと立上り
赤尾伊豆とは知らざりやと名をかく乱入敵を念なく
突退け追ひて少敵矢倉より鉄炮を厳しく打出させ
くまば立花の勢も強うふまいつく防まなく引退くかく
く少敵跪く鎗の穂先を門のくぐり戸に當て一人づ
静に入らるりかゝるるハ無禮よりへども門をぢり法あり
とのみ皆入終りて伊豆と平野と二人門外に殿しては
くろが平野ハ赤尾よまづ入よといひ赤尾ハ平野よ汝先入
よといひ終り赤尾はくろく入るといへり

赤尾伊豆ハ美作が子なりと信長は滅せり

信長江州小谷の城を攻め浅井長政勢盡く既よ自害せ
んとする時不破河内を以て縁者のよしと降参あり
は疎急あつてと云せしむる小長政降参すべき志は非
るを近習の士どもも別の子細もいまだ城をかく運
を罷らまじへといひあつば父下野守も共は疎急ありハ
降参せんとして城をゆるを信長見し長政何の面目有
く今更の降参ぞと高声に呼ばせらまじりハ長政忿
て赤尾美作が宅に入りて自殺せり浅井石見赤尾美作い
か切死せんといひかけ入るるを多兵押隔り生取く信長の
前よゆると信長汝等の長政をすめ朝倉ふくみ

両土

吾を敵とせしめたる果をんよと罵らるるは浅井居直
事新しきものを送らぬの哉義景を別事なく立並ん
との誓文其血もいまぶかたうざり小越前より軍を
是より長く長政義の當り如く義景は興し今日本
をゆき疎えあつとつらうりて初を押し只自害
と一とむらよ決しては若天運より家を立るな
らば信長を斯のごくかめんと思ふか成る義
を知れ恥を知れハ信長こそ人面獣心なまことハ信
長弥怒く汝詞も似て生ごころハおちて罵ら
るる小年老ぬまバカ小及び昔より士の生捕とされ
事恥らうる武勇を以て敵を討たせしむる事と
ハ

ア〜人の國を亡はして恥あるを人らまよ必下人よ首を
切るべしと罵りては信長杖を以て打ちつゝ石見
打笑ひからめける者よかゝるさうひはつをけよと大
將の禮儀うまいわらむとや犬坊と罵りては
石見も英作も終つて殺さるるなり
伊豆幼らうが僧と成る多賀の匡ま居る小十二歳の時
多賀明神の鳥居れわらうあて遊びをいづる家の
の士よや十二人打連て通る小行あつて士怒り小僧め
無礼なりとて拳あつて頭をうつ伊豆飛かり其士の刀を
抽く只一打は切りぬりつと走らぬけり赤尾よかくれ居
る〜が後京極よ仕へたり

○立花宗茂使を城中より取りて味方討死の中より十時傳
右馬門とす者ありしより不便に存るなり散をせり
よりりりてて物具の色を書き送りて送らるるやがて返
ぬ又城中より山田三右衛門首をとりて望まじ
くば曹を添へ送りて此を大津の死骸とて勇
死後のちまれしなり

○高次大津の城をとりて固りて高野の木食上人
を以て和平を執りて高次さるる同心なりし人
長臣黒田伊豫寄手よ心を通じてバカなく和平
城を以て京都大佛の養源院より立ちて高野小赴
関ヶ原記より三井寺より三成亡く後 東照宮高次を召く今度

諸將皆大功有り人々あまふ吾城一ツ守りてげざりし身は
立ちまらん事口惜しく知らざれば又使を以て御物語あり
し事あり尚出らざれば我行ん年老し身を労せし事
んよりハ若役も仰せまじく高次辞し去りてせられ
りり 東照宮此度城を攻ぐる敵兵大垣より程あり
関ヶ原の軍危るべきは九州の大軍を数日隔らざりゆえ
に来アしよりも遙はまされ敵よりくるる和平あまは
恥しむべし仰らる大津よその事あまは近江よ四十万石
賜ふべしとなりし高次すくかく賞せし事あり関ヶ
原より大功の人より百万石を賜はるべしおのひもいふべし

固辞コジツやされり

一説関ヶ原の軍敗イクサもくく 東照宮大津の城シロに入せり
山岡道阿弥供奉クハネもくくが京極宰相キヤウキョクサウジよく持モチもくくへり今
少の事コトもくく本意ホンイを遂トゲびもくくもくくを御答コタヘなりく奥平
が長篠ナガシノもくく武田タケタを防フセなりくは戸障子トシヨウジは鉄炮テツポウの玉タマのほと
鹿の子カノコをゆひもくくがめく土も落ち板イタもぬけもくくをゆひ
をもちたまひを立テ持モチもくくもくくもくく仰オホセもくく又高次タカツグの使者
多賀孫タガノ左衛門大坂オオサカもくくありもくくは御前ゴゼンは召シもくく京口の
旗ハタをよくもくくもくくを敵攻入セメイリもくくもくく召シもくく仰オホセ有アリもくく
へり口惜クナラシくもくくもくくもくく涙ナミダを流ナゲもくくもくくもくく井伊本多
は向ムカひ下部シモのス木履ホクリは雪ユキのシもくくもくくもくく御出馬シユツバは

やぶれあんどカクの如カき城シロは高次タカツグもくくもくくもくく教日スツツ敵テを
支サへりもくくもくくもくくもくく戯ウタガハシもくくもくくもくく理コトワリなりもくくもくくもくくへられ
もくくもくく

○立花宗茂タチバナノムネノシゲ大津オホツの城攻シロセメは足輕アシカゲは繩ナバだもくくもくくもくく其繩目ナバメ
は五茶イツチヤの早合ハヤガフををさませもくくもくくもくく箭ヤをつもくくもくくもくく早く鉄炮テツポウを
持モチせりもくくもくくもくく

又細川家オホスガハの鉄炮テツポウハ口菜入クチナシイレを革カバもくくもくく今世イマヨのたれもくくもくく
のめく造ツクもくくもくく用モチふ事コトの急キヤウもくくもくくもくく指サシもくくもくくもくくひもくく入イれ
利リあり又加賀カガの吉田大藏ヨシダオホクラもくくもくく世ヨもくくもくくもくくもくくもくくこれの射
手テはり常ツネは矢ヤを取トルく俄ニハサは知チる時トキ十筋トスギも持モチもくくもくく事コトは
あもくもく腰コシはささバ走ハシるもくくもくくもくく落オツるもくくもくくもくく草カバもくくもくくもくく角袋造カクダクシロツクもくく

緒を付腰コシまきげそれよ入で腰コシまさりたり其名を猿頭サカシ

と名付しり

○會津アヒツは向ムカさせもあ時伏見フシミの城シロは本丸ホンマルは鳥居トリイ彦右衛門モトタケ元忠モトタケ
二の丸ニノマルは松平マツダラ主殿頭家忠ヌシノカミ松平マツダラ五左衛門イチノサ松の丸マツノマルは内藤ナインドウ弥ヤシ
次右衛門イヘノサ家長イヘノサをオウせもひ六月十六日 東照宮トウショウミヤお立タりし十
七日伏見フシミの城シロも鳥居トリイを召メシ今度イマド士卒シソツ少スクキくして残ノコと止トシメ
事コトを仰オホ有アリし元忠モトタケ臣シ存ズる所今津イマツハ強敵ガウテキなり一人ヒトなりた
召具メシメせられて然シカべし伏見フシミは臣シ一人ヒトのみ事コト足タリは世上セニヤウ毎スジ々
たつとどくそ変ヘンの出来人キニゴク時ハ近國チニゴクは援スクふべき味方ミカタもいり
今の十倍ジツバは軍兵イクサを殘ノコし退ヒきしりとも防マぐべきやういハ
むとやうふ 東照宮トウショウミヤ黙モクしそおをせしげや有て駿州スシ

宮ミヤヶ崎サキのく十一ユは成ナし時彦右衛門トキヒコハ十三スまで初ハジメて物モノしりしよ
年トシ久キウくもなかりぬとて御物語ミモノガトは夜ヨのく深フケ々々も元忠モトタケ會アイ
津ツの御留守ミドモリ世ヨは変ヘンなくいひあるんハ復ヒタ御目見ミメシも仕シあるん
ゆゑ事コトあは今夜コノヨぞ永ナガき御別ミワケまじりていとやと座ザを立タ立タ
しりしふ 東照宮トウショウミヤ御袖ミソデをりて落オチる泪ナミダをオしひてぞおし
あしりしかくく石田兵イシダヘイを起オコせしりバ伏見フシミを攻ウべきやと評ヒヤク
定サりし増田長盛マサカ城固シロカタくしてあうも内府ウチノフの内ウチは名高ナタカた
ゆゑのどもあればなきやとく落オチべく先マたりし見人ミとく
山川半平ヤマガハを使シしり元忠モトタケ對面タイメンすもバ増田マサカがゆゑハ今度イマド
輝元テルモト秀家ヒデイヘ景勝カゲサツ徳川殿トクカウテンと弓箭ユミヤをとし九州クウシュウ中國チウクの諸大シヨダイ
名皆ナナ同ドウんせしりまは此城ココを請取ウケトリしりべし長盛ナガサキく

く徳川殿の御志を以て海に流し給へば此事然るべしと存ん
たも思慮の及ぶべきやあは伏見の城ハ太閤さま
まゝ今徳川殿姑くあづかりておぼしませバ徳川殿の城と
すべきやあは城をゆく内府は忠を致さる道あるん
と存るより送るれば元忠固てより内府會津に向ひ
一時かく守りて敵不渡る事ハ存もよ
増田殿ハ内府よまゝみ有ゆ急かる事を述べし心得ら
まづい若あめくと城を渡さんと同くハ城を枕せしもの
使者まかりいれと泰しとて城をゆくハ武將此
諷よハあゝ事とも存せざるともあは討死せんと
答へしをかくと長盛よ告るかゝるは渡邊勘兵衛ありが

はくくぞて感入り頻に涙を流しければ長盛も我と
をくき人を殺さん事のなげりしこと共涙を流し
とぞかくと三万餘りの名を四方より攻くるも少しもひ
まづ十日余防ぎくまは甲賀の者内通して七月晦日の夜
松の丸に火をかけしバ寄手力を得て攻入り内藤ハ精
兵れよきとくさし詰り詰射る矢は死人数をたゞ
終に内藤父子も討死し主殿頭五左衛門を始として残なく
切死せしむる元忠本丸のみ門を衝き門際より
六七間あざりし士卒三百餘白刃を抜るるもまづりか
つて待たせし寄手も攻入兼くきめしひりくえ
忠大音あげ一人も敵を討く死せし士志なき吾

三方ヶ原まで足^{アヒ}手^テ負^オひ行^キ歩^ブ心^{ココロ}よ^ヨう^ウせ^セま^マでも^モ逃^ニ人^{ヒト}と
せ^セば^バこ^コも^モ足^{アヒ}を^ヲも^モ頼^タま^マめ^メい^イざ^ザ最^{サイ}後^ゴの^ノ軍^{イクサ}せ^セよ^ヨと^ト下^シ知^チま^マる^ル声^{コエ}を
聞^キく^ク一^{イチ}回^ワは^ハ切^キつ^ツ出^デ面^{オモテ}も^モあ^アら^ラず^ズ戦^{タケ}ひ^ヒく^ク一^{イチ}人^{ヒト}も^モ残^コら^ラず^ズ討^{ウチ}死^シ
し^シく^ク元^{ゲン}忠^{チュウ}戦^{ケン}ひ^ヒ疲^{ツカ}ま^マら^ラず^ズ玄^{ゲン}関^{ケン}は^ハ腰^{コシ}を^ヲか^カけ^ケ息^{イキ}を^ヲく^クま^マす^ス
雜^サ賀^カ孫^{ソン}市^シ重^{ジュウ}次^ジ死^シ骸^{ガイ}を^ヲ踏^{フミ}越^{コエ}く^クす^スみ^ミよ^ヨま^マば^バ吾^ワハ^ハ鳥^{トリ}居^キ彦^{ヒコ}
右^ミ丞^{ジヤウ}よ^ヨ首^{カビ}取^トく^ク功^{クワウ}名^{メイ}よ^ヨせ^セよ^ヨと^ト物^{モノ}具^ク脱^{ダツ}で^デ腹^{ハラ}を^ヲ切^キら^ラう^ウ
ら^ラば^バ雜^サ賀^カ其^シ首^{カビ}を^ヲ取^トり^リり^リ本^ホ丸^{マル}は^ハ二^ニツ^ツの^ノ門^{カド}あ^アら^ラう^ウと^ト夫^{ソノ}
手^テの^ノ外^{ソト}は^ハな^ナ堅^{カタ}く^ク鎖^トし^シて^テら^ラれ^レバ^バ一^{イチ}人^{ヒト}も^モ逃^ニち^チる^ル者^{モノ}な^ク
討^{ウチ}死^シし^シく^クと^ト我^ワら^ラ後^{ノチ}元^{ゲン}忠^{チュウ}の^ノ首^{カビ}を^ヲ大^{オオ}坂^{サカ}京^{キヤウ}橋^{バシ}に^ニ梟^{ケウ}せ^セし^シと^ト京^{キヤウ}の^ノ
高^{タカ}佐^サ野^ノ四^シ郎^{ロウ}右^ミ馬^{ウマ}と^ト云^イふ^フの^ノを^ヲ居^イま^マす^スと^トみ^ミま^マす^スが^ガあ^アる^ル忠^{チュウ}
義^ギの^ノ人^{ヒト}は^ハ首^{カビ}を^ヲ惡^{アク}逆^{ギャク}の^ノ罪^{ツミ}人^{ヒト}と^ト同^{ドウ}じ^ジく^クに^ニあ^アら^ラう^ウや^ヤあ^アら^ラう^ウ

と^トて^テ夜^ヨ深^{フカ}て^テ盜^{ヌス}取^{ビリ}智^チ恩^{オン}院^{イン}に^ニ葬^{ナシ}ア^アる^ル一^{イチ}字^ジを^ヲ建^{ケン}龍^{リウ}見^{ケン}院^{イン}と
名^ナ付^{ツケ}し^シら^ラば^バ石^{イシ}田^{デン}の^ノ必^{ヒツ}定^{テイ}刑^{ケイ}罰^{バツ}さ^サす^スと^トせん^{セン}あ^アら^ラう^ウ事^{コト}なり^ニ
云^イふ^フ者^{モノ}あり^リ佐^サ野^ノ吾^ワ久^クく^ク恩^{オン}を^ヲ受^{ウケ}け^ケた^タま^マす^スバ^バ白^{ハク}刃^{ジン}を^ヲ
あ^アら^ラう^ウ事^{コト}なり^ニ是^{コノ}程^{ハダ}の^ノ事^{コト}ハ^ハ人^{ヒト}の^ノ義^ギな^クり^リ義^ギあ^アら^ラう^ウ
禽^{キン}獸^{ジュウ}なり^ニ人^{ヒト}生^ナく^ク死^シせ^セざる^ル事^{コト}なり^ニ刑^{ケイ}罰^{バツ}あ^アら^ラう^ウ事^{コト}
ち^チと^トあ^アら^ラう^ウ事^{コト}なり^ニ

雜^サ賀^カ孫^{ソン}市^シ後^ゴ水^{スイ}戸^ト中^{チュウ}納^{ナク}言^{ゴン}家^ケに^ニ仕^シへ^ヘら^ラう^ウ事^{コト}あり^リ中^{チュウ}
だ^ダら^ラを^ヲ以^モて^テ鳥^{トリ}居^キ忠^{チュウ}政^{セイ}の^ノり^リと^ト云^イふ^フ事^{コト}あり^リハ^ハ重^{ジュウ}次^ジむ^ムじ^ジ
伏^{フク}見^{ケン}の^ノ城^{シロ}に^ニ元^{ゲン}忠^{チュウ}此^{コノ}御^ミ宍^{シク}野^ノに^ニあり^リあ^アら^ラう^ウ事^{コト}あり^リ其^{コノ}時^{トキ}の^ノ御^ミ
物^{モノ}具^ク吾^ワ家^ケに^ニ取^トり^リ傳^{デン}へ^ヘら^ラう^ウ事^{コト}あり^リ先^{セン}考^{カウ}の^ノ形^{カタ}見^{ケン}よ^ヨて^テは^ハ法^{ホウ}修^{シュ}せ^セ
ん^ン為^タる^ル事^{コト}あり^リと^ト云^イふ^フ事^{コト}あり^リ忠^{チュウ}政^{セイ}悦^{エツ}んで^デあ^アら^ラう^ウ事^{コト}あり^リ

ガ形見是ふるべり〜一日見をやと答ふ重次自ら携て
もき〜向ふ忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招て亡父
は再対面の心地さ〜涙を流〜甲曹太刀刀柄板の
上よかた居〜是を拜〜さて今日重次を饗せ〜おれ
誠よ美盡せり其翌日重次の方小使を立昨日の見参
を謝さて又重次の御志よ〜父が最後は帯せり物眞
再び刀柄事迄〜も挽入存ひひぬ忠政が事傳へ〜
父が形見よ見るべき物もさ〜なる〜見苦〜ハハ〜も
此物具重次の家よ〜あ〜は武名を子孫に傳へらま
ん事弓袋此道よハよた御遺戒よのやんべき〜甲
曹太刀か〜な〜〜遣り〜年毎よ

冬綿厚く入〜衣五領使者よの〜せ〜
水戸よ贈と遣〜音信を通〜事忠政が二期の
終よ〜水戸公此由〜名大よ感〜
鳥居が使者の来るべき前道梁を修理させ重次よ
客儲さ〜魚鳥や〜の物賜ひ〜
○筑前中納言秀詮先陣の士大将平岡石見松野主馬各
様一万石なり伏見の城攻よ主馬が仕寄の竹把を城中より
火箭を射うけ焼〜は其所を退き〜竹把を付
んと〜も村上三右衛門焼跡よ竹把を付〜
ハ何〜主馬と相謀〜竹把を付直〜竹把
の上よか〜土をぬ〜ま用意〜主馬外よ物事

嫌ふ人々ハ士々も内々も土をくのみらまはし又土をぬ
こころん老ハ中間下人なるとも士とせんと下知れ
バ下終八人女々土をぬりつりつる其後外把を焼く
しこころ旗本より大嶋源二といふ者使よ来り仕寄場
より掘端まで間敷幾許あると問ふに村上間を打て見
ゆゆ凡十二間許りやあんと答ふ大島とてその事小間
を打んといへバ城近く箭玉の飛来る所強きを知らず何
の為ぞといふ源二殿は問まらる間をうらへといはんは
快うとぞといひつる六村上旗本の使小先陣の間をうら
する事ハ有まらとて村上静ふ女々竹を間等より切一間づ
うり源二先へ取らるる一ツツとち終まバ士間半之

大嶋村上進退のふるまひ見物なりと云あへりつる源

二ハ廿二歳伏見落城の日討死しつる

○三刀谷監物孝和ハ其先祖兼久の亂ハ軍功有り出羽云の三

刀谷の郷を賜たりつるふより氏とつり其末雲州尼

子の旗下ハ屬しつり孝和父彈正左衛門久扶毛利家ハ奉

公しつる後仕を止て終りぬ孝和ハ吉田兼治またより

吉田ハ居しつるを関ヶ原の村安國寺北村五郎右衛門を使

ひつるまはつたてり聞入りて細川幽齋の丹後田辺の城

より行く力を合せんとに従者ども奥州ハ大國なり景勝

勇將なりといふでせやとて破るべき西國一同ハ石田ハ興

りひぬ徳川家の危き事近きより何とて安國寺ハ招を

いたるころあざと云々孝和の石田嶋津に叛らせ内府
を引付軍を起させあつて京大坂を取らん謀こそ然
るべからし徳川家の領國其便よた會津に手始をては
無謀あり三成必定勝べうとて吉田家の函秋と縁者
しりしは田邊より大敵ふかす備まつしりし持こそし
ハ偏に孝和が智勇きくまかりたるをあり

○大坂の軍兵一万七千を以て田邊の城を攻る細川忠興ハ奥
州に赴た父函秋城より三刀谷孝和大剛の人より度々切
て出防ぎ戦ふ幽齋和歌長人たり古今集の秘決
為家卿の志るされを殊に秘藏せしむるが兵火は為
焚ん事を桂光院知仁親王慮らせむ使を以てかの古今

集源氏物語を禁裏よまのせよとなり又鳥九大納言光
宣卿勅命を奉りて城に赴きまふもり則其書を
奉りて

又鳥丸光廣卿のめく封し歌書をや

斯るや前田徳善院を禁裏よ召田邊の城責和平の事
を勅命ありて寄手かきを解く幽齋城を知らし
りあり光廣卿函秋の許より送られ書いふ封をひ
きこふはりりりりりり

あけくぬかひもあつたり

幽齋かへしふ

浦島やひうりをとくまもあけてこころをたかきと波哉
一説藤原公國卿早世ありて其子実條卿幼りしらバ
和歌の口傳を幽齋に傳へらまはり後よ函女実條卿を
田辺比城に迎へたりて養育し悉授けらまはり古今集
の説ハ未傳へらまはる中ハ朝鮮征伐の事起りしらバ
弓矢名所ハ討死のわざたりかごとく古今傳
授の事書ける書の箱を鳥丸大納言光廣卿へ贈らま
預けまはりて間敷祥之次若討死せば実條卿へ渡
しつらりしとて添らまはり歌
人の國ひもや八雲も作らまはりしひかへせぬかの浦浪

ゆゑまかた集あはるゆゑあてむうよかへせぬかの浦波
光廣卿のかへしふ

あ代をちかひりての鏡志まいてりあけんうつろりま
其後秀吉遺言して豊後旧村を函女の男忠貞よかへ
あへらまはりては光廣卿より言をかくはりて

ゆゑまかた集あはるゆゑあてむうよかへせぬかの浦波
函斎田辺の城をちかひりて勅命より三條大納言實
條卿へ附し傳へらまはりて一首の歌あり

○古田助左衛門ハ古田兵部少輔重勝に仕へて禄千石を受く
景勝を征伐の時重勝伊勢の松坂比城に助左衛門を置き

たり三成岳を起せし時大坂の重勝は屋敷をとりかきみ
松坂の城を渡さばハ重勝の北北方を殺害せしむといひ送
りし小助左衛門此城ハ殿の仰なき人ハ渡さん事存と
よび居若さあはれは此方害にあひあさんとや誠小のま
し事なるもいふせん妻子の死さるが悲しむとて城
を敵に返せしと殿を人殺しやべし運辱しつて死を潔く
さる事弓箭しる身の習ひたり人々ハ大坂の屋敷ゆて
いふもぬれ敵やぐて城よまらばぬふ軍しと討死し
冥途よく對面せんと大坂の屋敷よ云送りりかきみ
重勝も東國より歸り来り松坂よきて龜る此時富田信
濃守信高阿濃津を守らましが加勢を重勝よ乞ふ兵を

分ちやるべき体のたよりなきに小助左衛門阿濃津へ加勢あり
ん事尤望むふなり敵阿濃津を攻め其後爰に攻来らん若
阿濃津落さるる小東方の味方来らば敵敗北せん其時は
古田が士ハ敵の旗をさふふ足富田が力あり松坂を持しり
など人小笑はるべし又加勢は隣國相援ふの義小叶
ひ又阿濃津より敵を防ぎハ古田が加勢の故なりと世に
申しべしと初めく五百人の軍兵を阿濃津よりやりたりやが
て重勝の領知れ百姓の中ハ大家ある者二十人を士としそ
城よこめせ後ハ百石の地をあはれしと約しり是人質の
心よく百姓をさるがせしむの術あり関ヶ原の乱治あり後
重勝約は背んとせしめし小助左衛門信を失ふハ君の道

よあ〜びんか〜言葉ハ金石よりも堅くま〜べき事なり是
より後又欺ん〜と〜百姓ども何事もゆ〜入〜信なくバ
立〜と〜事〜の臣ガ禄地を分ちあ〜と〜い〜れバ
重勝約の如くせ〜れ〜り

常山紀談卷之十四終



早稲田大学図書館

011688998150